講師 ： 深澤芳樹
天理大学客員教授

「天武天皇の時代
～壬申の乱から藤原京の成立まで」 を聴いて

聴講日 ： R 2.1.11
むきばんだやよい塾第20期

天武天皇とは大きな構想を持ち、それを実現した優れた指導者と言えます。西郷信綱氏は著書の中で、「天皇号や国号だけでなく、古代の王権を彩る儀式や典礼、物語や歴史、あるいは歌舞や音楽等も、ほぼこの時代に定立されるに至ったと見て誤るまい。」と述べています。

岩波日本史辞典の天武天皇の項には、“大海人皇子。舒明天皇の皇子。母は皇極(斉明)天皇で、天智天皇の同母弟。高市・草壁・大津皇子らの父。兄天智のもとで皇位継承者に擬されて活躍したが、天智の晩年に後継者とされた天智の子大友皇子と対立、吉野に逃れた。天智没後の672(天武1)、大友皇子との間に壬申の乱が起き、それに勝利して翌年飛鳥浄御原で即位。万葉集に〈おおきみは神にしませば〉とあるように君主権を確立、有力豪族を官僚制の下に組織するなど天皇を中心とした中央集権政策を進めると同時に、法典の編纂、神祇祭祀の整備、仏教統制の強化や修史事業などに力を注いだ。”と書かれています。

天武天皇の国づくり

もし国を治める立場に立ったら、現在を中心として国の将来をどのようにして、過去をどう整理するかの三つで考えるでしょう。①将来については律令を定めます。律令とは刑罰と法令です。②現在については国治めの理念を伝えるために昔の人は地上にモニュメントを作りました。理想世界を地上に作ろうとしたのが、藤原宮・京です。③過去については現在の自己のアイデンティティを確かめるために、過去の歴史を整理して自己の正統性を示します。これによって現在・過去・将来において自分たちの世界が確実になります。

天武10年2月条には、「朕は今からまた律令を定めて、法式を改めようと思う。共に、このことを修めなさい。しかし、急にこれだけを実務にすれば、公事ができなくなるだろう。人手を分けて行いなさい」とあります。即位した飛鳥浄御原宮で一度発布した律令を、もっと整備したものを作ろうとしました。唐律に倣いながら、日本の実情に合わせ改良され20年後に大宝律令として発布されます。

天武12年には、伊勢王らに天下を巡行して、国境の制定を行っています。また、天武14年には天皇を筆頭とした国家の組織を作り上げています。ひとつは姓制で、朝臣とか宿祢とか、連、臣とは家柄の格付けです。諸王より上を12階に、臣下にあたるものが48階に分類して衣服の形と色を定めました。勤務評定にもとづく昇進制度も作られています。勤務評定は3段階、或いは4段階(後の養老令では内長上の勤務は上上から下下までの9段階評価)で、勤務態度よりは出勤日数が重要のようです。宮廷儀礼も定められ、ことばの使い方や身振りなどもを定められています。階段を登るときは鳥足と呼ばれる伊勢神宮の宮司の歩き方で、中国などでも臣下の身振りのあり方として定められていました。

内紛の防止として天武8年に天皇は皇后、草壁・大津・高市・河嶋などの皇子全員を集めて吉野に行幸し、相互の親和と扶助の誓約を行わせます。

経済的には貨幣を鋳造していきます。大津京にある崇福寺の塔心礎に置かれた状態の銀銭が出土しているので、大津京の時代には銀銭が使われていたことが分かっています。天武12年に今より後は銅銭を用い銀銭を用いてはならないとあります。銅銭とは富本銭であることが発掘から明らかになっています。現場から富本銭と同じ大きさの銀の円盤が断ち切られた状態で出土していることから、この記事の裏付けとなっています。

天武10年に帝紀(天皇の系譜と事績)と上古の諸事(伝承や説話)を編纂するように命じています。このうちの一つが40年後に完成する『日本書紀』です。伝承や説話に相当するのが『風土記』です。未完成で散逸してしまいましたが、出雲・播磨・常陸がほぼ完全の形で残っています。

理想の国家「藤原宮・京」

基本的理念を形としてできたものが“藤原宮・京”ですが、金光明経という経典に寄っています。須弥山を中心にして周辺が形成される世界です。東大寺の森本公誠氏によると金光明経とは、国王のために説かれた経典だといえ

ます。国王がこのお経を信奉すれば四天王がやってきて、この国王が納める国土を守護すると説きます。国家を構成する要素は三つあり主権或いは統治権、人民、領土だとされます。須弥山の頂上に神々の世界があり、そこには帝釈天を始めとする33の神々が住み、四天王が須弥山の中腹に住み、東西南北に分かれて部下達とともに四方を守っていると説かれています。これは一種の王権神授説です。

中心に理想を置いて周囲に下のものを配置する考え方は、孔子が理想とした周の行政組織を著した『周礼』にも登場してきます。『周礼』は、周王国の官制を記したとされ、新や北周などの現実の政治制度に一定の影響を与えた職官書です。

奈良文化財研究所の同僚の解説書には藤原宮・京は『周礼』に基づくとあり、半分はあたっています。藤原京と平城京では、宮と京の構成が全く異なっています。解説書ではその理由を天武天皇が中国の事情を全く知らなかったからだとしていますが、そんなことはあり得ません。当時の中国の都城は北端に宮殿を置き、南方に京域(人民が住む場所)を配するのが伝統下にあります。すなわち既に邪馬台国の時代から中国では都の形が定まっていて、遣隋使・遣唐使は謁見して得た都城の情報は天武天皇に伝わっていたはずだからです。

銭国祥氏は、「漢魏洛陽城は、西周から後漢や北魏等累計600年間、都城として使用されており、1962年より調査が行われてきた。2007から2011年度には、奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との日中共同調査が行われ、北魏宮城中央南部のショウ闔門、2号門、3号門について、位置と規模、形態や構造が判明し、北魏宮城の西の境界があきらかになるとともに、層位の明確な遺物によって編年研究が進んだ。漢魏洛陽城は曹魏時代から単一の宮城を北側中央に置き、宮殿前に軸線に沿って大通りを置くという配置を採用しており、後世の主要な王朝の都城形態は日本の都城も含め影響を受けている。」と述べています。

天武天皇は中国の情報を知りながら、確信犯でいままで見たことのない都城を作り上げたと見ざるを得ません。その時の根本理念は金光明教にあるとみてまず間違いありません。

壬申の乱の勝利

天武天武が迅速に国内整備を行えた理由の一つは、9年前の白村江の敗戦です。記録に残る兵士の数は27,000人ですが、恐らく数十万単位の兵士が投入されていると思われます。しかも海上戦なので溺死を逃れた兵士も大量に捕虜にされたと思われます。そのときの主要な戦力は西国の兵士でした。敗戦後に西域に城を築いて固め直した時に派遣されている防人は東国から徴用されていることから考えて、西域がいかに壊滅的だったかと思われます。社会全体が消耗した時代で、新しい政策を打ち出すのにアドバンテージがあったことが理由の一つだと思われます。戦国時代の朝鮮出兵後の徳川や第二次世界大戦後の新しい国をつくれたのも同じ理由ではないでしょうか。

もう一つの理由は壬申の乱に勝利してカリスマ性を得ることができたためです。有力者は一人でよいことを察知した天武が吉野に逃亡するところから壬申の乱は始まりますが、天智10年10月吉野に着いた天武は幼いころから随行している舎人たちに、「自分は吉野で修行をするからいっしょにここに留まるか、或いは大津に仕えて出世したければ帰れ」と言い渡し、それを二度繰り返しました。半数が帰りましたが、より信頼感の篤い舎人が残りました。

東国を大津方に支配されるのを恐れた天武は、兵士を差し向けて「不破関を抑えよ」と命じました。本隊が名張の横川に着くと夕暮れの空に黒雲が現れたので、明かりを出して式で占うと「天下両分だが、最後は吉野方が勝つ」と陣営内に知らしめました。

近年敦煌から発見された『占雲気書』という古文書には、五行相剋による勝敗占いが書かれています。吉野を出発した6月24日は旧暦では甲申(きのえさる)です。甲は、五行の“木”に当たり、敵方の雲の色の黒は“水”に当たります。自陣の木は土に克ち、土は水に克つと言う二段階で克ちますが、敵陣の水は火に克ち、火は金に克ち、金は木に克つと言う三段階かかるので、自陣が勝つと天武は読み取ったのです。

大津方は思わず発する声で気付かれないように梅(くちき)を噛んで吉野方に夜襲をかけます。同士討ちを避けるために“金”と言う合言葉を決めて襲い掛かりますが、吉野方に合言葉を見抜く者がいて全滅を免れます。古事記の選録者・太安万侶の父とされる多臣品治の騎馬兵も参戦し、それにより一時敗走していた大伴連吹負も挽回して大殊勲をあげます。形勢逆転して大津方は敗走し、ついに大友皇子は山前に追い詰められて自刃し、吉野方勝利で壬申の乱は終結しました。

万葉集

当時の雰囲気を万葉集で味わいます。

熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひぬ　今は漕ぎ出でな

【通釈】熟田津で船に乗ろうと月の出を待っていますと、月が出たばかりでなく、潮も満ちてきて、船出に具合がよくなりました。さあ、今こそ漕ぎ出しましょう。

百済滅亡の危機に際し、難波津を出航した倭国の船団は、熟田津(現在の愛媛県松山市の辺り)に停泊します。暗い海路に月の光が射し、潮が満ちてくる情景を前に、困難な航路へと旅立ってゆく人々を鼓舞し勇気づける、額田王の代表的名作です。

味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積もるまでに
つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　心なく　雲の　隠さふべしや

【通釈】三輪の山は、奈良の山々の山間に隠れるまでも、道の曲り目が幾重にも重なるまでも、つくづくとよく見ながら行きたいのに。何度も眺めやりたい山なのに、無情にも、雲が隠すなんてことがあってよいものだろうか。

古京への別れは大和三山でなく三輪山です。空想で詠んだ歌でなく実景を詠んだ歌です。

あかねさす　紫野行き　標野行き　野守は見ずや　君が袖振る

【通釈】紫草の生える野を、狩場の標(しめ)を張ったその野を行きながら、そんなことをなさって――野の番人が見るではございませんか。あなたが私の方へ袖を振っておられるのを。

紫草の　にほへる妹を　憎くあらば　人妻ゆゑに　われ恋ひめやも

【通釈】紫草のように美しいあなたを憎く思うのなら 人妻のあなたをどうして恋しくおもうでしょうか

この二首が相聞の部でなく、雑歌の部に分類されていること、また題詞には「額田王の作る歌」とあって、「贈る歌」とはなっていないこと等から、額田王が大海人皇子個人に向けて思いを伝えた歌でなく、宴などでおおやけに披露した歌と思われます。

君待つと　我が恋ひ居れば　我が宿の　簾動かし　秋の風吹く

【通釈】あの方が早くおいでにならないかと、恋しくお待ちしていると、我が家の簾がそよそよと動き――あの方かと思ったけれど、お姿はなく、秋風が吹くばかり。

み吉野の　耳我の嶺に　時なくぞ　雪は降りける　間無くぞ　雨は降りける　その雪の
時なきがごと　その雨の　間なきがごと隈も　おちず　思ひつつぞ来る　その山道を

【通釈】吉野の耳我の嶺に絶え間なく雪が降る。ひっきりなしに雨が降る。その雪の絶え間ないように、その雨の途絶えることがないように、道の角ごとに、ものを思いながら来たのです。その山道を。

天智10年に天武天皇が吉野に下った時のことを思い出して詠んだ歌と考えられています。

かけまくも　ゆゆしきかも　言はまくも　あやにかしこき　明日香の　真神の原に　ひさかたの
天つ御門を　畏くも　定めたまひて 神さぶと　磐隠ります　やすみしし　我が大君の　きこしめす
背面の国の　真木立つ 不破山越えて　高麗剣　和射見が原の　行宮に 天降りいまして　天の下
治めたまひ　食す国を　定めたまふと 鶏が鳴く　東の国の　御軍士を　召したまひて　ちはやぶる
人を和せと　まつろはぬ　国を治めと　皇子ながら 任けたまへば　大御身に　大刀取り佩かし
大御手に　弓取り持たし　御軍士を 率ひたまひ　整ふる　鼓の音は 雷の　声と聞くまで
吹き響せる　小角の音も　敵見たる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでに 差上げたる
幡の靡きは　冬こもり　春さり来れば　野ごとに　つきてある火の　風の共　靡くがごとく　・・・・・

持統十年(696)七月、高市皇子が薨去し、その殯宮の時の柿本人麻呂の作で、全百四十九句に及ぶ、万葉集最大の雄編です。吉野方は味方の印として前漢の高祖劉邦に倣い赤旗を掲げていましたが、人麻呂はそれを戦場の野火に例えて詠んでいます。

楽浪の　志賀のからさき　辛崎さきくあれど　大宮人の　船待ちかねつ
【通釈】志賀の辛崎は、その名のように幸(さき)く――無事平穏であるけれど、大宮人の船を待ちかねている。

大君は　神にしませば　赤駒の　腹這ふ田居を　都と成しつ
【通釈】大君は神でいらっしゃるので、栗毛の馬が腹ばっていたような田んぼでも都とされた

大君は　神にしませば　水鳥の　すだく水沼を　都と成しつ
【通釈】大君は神でいらっしゃるので、水鳥が群がるような沼さえも都とされた

北山に　たなびく雲の　青雲の　星離り行き　月を離れて
【通釈】北山にたなびいている青雲が、遠くへ離れていってしまいます。星たちから離れて、月からも離れて遠くに
　この歌は、持統天皇が天武天皇が亡くなったのを悲しんで詠んだ歌です。天武天皇を雲にたとえて、月や星にたとえた持統天皇や皇子たちから離れていったように詠んだ歌と考えられています。

わが背子を　大和へ遣ると　さ夜ふけて　暁露に　わが立ち濡れし
【通釈】私の弟を大和へ帰そうとして、見送りながらたたずんでいるうちに夜が更けて、夜明け方の露に私は立ちぬれてしまったことだよ。
　天武天皇の皇女で伊勢神宮の斎宮であった大伯皇女が、密かに訪ねて来た弟である大津皇子を見送った時の歌です。天武天皇の崩御後に草壁皇子と皇位継承争いをしていた弟の身を案じたものですが、この歌の直後に大津皇子は謀反を企てたとして処刑されてしまいます。

春過ぎて　夏来たるらし　白妙の　衣干したり　天の香久山
【通釈】春が過ぎて、夏が来たらしい。白妙の衣が香久山の方に見えます。
香具山は神の山で洗濯物を干すはずはなく、山腹に残るまだら雪を布に見立てて詠んだ歌です。